



〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島教区
電話099 (226) 5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行 教区広報部
1部60円年間千共1100円



教区の皆さま、新年明けましておめでとうございます。旧年中に皆さま方から頂いたたくさんの祈りとご協力に対し、感謝申し上げますとともに、今年もどうぞよろしくお願いいたします。皆さまの上に神の豊かな祝福がありますように。

教区目標

さて、私は、今年の標語（目標）として「洗礼の恵みに気づき、それを生きよう！」を掲げました。この標語は、昨年10月に開かれた「教区評議会」で話し合われた事柄を踏まえて、その後の司祭評議会で示された教区の具体的な動きを推進するために必要で基本的な信仰上の確認事項であります。

私たちが集っている「教会」は、「父と子と聖霊の御名によって」洗礼を受けた信者によって構成されています。私たちはこの1年、「信者」つまり洗礼を受けた者の自覚を深めていきたいと思っています。

幼児洗礼と成人洗礼

信者は、洗礼を受けたその時期によって、2種類に区別されます。それは「幼児洗礼」と「成人洗礼」の信者です。この2種類の信者についてお話しします。

「幼児洗礼」とは、家族の意思、あるいは、親の意思で幼児の時に受洗したもので、本人の意思あるいは同意はありませんでした。カトリック教会は伝統的に

この幼児洗礼を有効なものと認めています。

その子に対して、また、その子の将来の幸せを確証させるために行使される幼児洗礼は、当然親の親権の行使として認められ、勧められます。但し、洗礼は秘跡（見えない恵みの見えるしるし）ですが、自動販売機のように簡単に幸せが手に入るものと考えてはなりません。

ができるのではないかと考えています。つまり、幼児洗礼を隣人関係で捉えるという事です。

親子関係

まず、幼児洗礼から説明します。夫婦は、その子の受胎を知った瞬間からその子を愛し始めます。しかし、聖パウロは次のように言っています。「天地創造の前に、神は

「天地創造の前に、神は

年頭の辞

2024年 年間目標

洗礼の恵みに気づき、それを生きよう

鹿児島教区司教 中野 裕 明

その子が成長し自己判断ができるようになった時、親はその子に洗礼を授けた理由をきちんと説明できるように常日頃から準備しておく必要があります。なぜなら、親はその子に代わって洗礼を望み、信仰告白をしたのですから。

「成人洗礼」とは、理性

がはっきりしていて、自分の自由意思で受洗した人のことです。歩んでいた人生のある瞬間にキリストと出会い、キリストを知り、キリストの示す道を歩き、キリストに倣って生きていくことを決意した人のことです。

この二つの洗礼のかたちは、「親子愛」と「隣人愛」の関係で捉え直すこと

わたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです」（エフエソ1・4〜5）。

この聖パウロの説明を聞くと、私たち信者は神によ

って召された者であることが分かります。そして、聖パウロが言うところの、神のお定めが私に実現したのは、私を愛したくれた親の決断による、という風に理解できるのです。

イエスが洗礼者ヨハネの洗礼を受けた時、天から「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（マタイ

3・17）という声が聞こえました。これは天の父による我が子への認証であります。この認証を受けてイエスは「死と復活」による人間の罪からの解放という自己犠牲を伴うわざの実現のために邁進することができたのだと思います。

隣人関係

一方、「成人洗礼」の人においては、人生を誠実に生きる中で、どうしても遭

遇する対人関係での挫折や裏切りを経験する度に、救いへの希求が芽生えます。そして、人を根本的に拘束している原罪の存在に気づき、それを取り除いてくれるイエスに出会います。

ユダヤ人の教師であったニコデモとイエスの対話

は、洗礼の意味についてのものです。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と問いかけるイエスにニコデモは答えます。「年を取った者が、どうして生まれることができましよう。もう一度母の胎内に入って生まれることができるとは、どうい

うことか。それに対してイエスは、「だれでも水と霊とによって生まれなければ、神

の国に入ることはできない」と返答します。（ヨハネ3・1〜21参照）

ニコデモの考えは、現実的で、科学的です。しかしそれを凌駕する答えをイエスは示します。それは、洗礼によって、人は生まれ変わる

ことができるという告知です。このことを聖書の

ことばでは、回心（メタノイア）と言います。洗礼の時、受洗者は神への信仰宣言の前に悪魔とその栄華との決別を宣言します。ニコデモとの対話の最後にイエスは次のように言います。「光が世にきたのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇を愛した。それが、もう裁きになって

いる。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかにされるためである」（ヨハネ3・19〜21）。

その後ニコデモが洗礼を受けたかどうかは不明です。ただ、イエスの埋葬の

場面で、「かつてある夜、イエスのもとにきたことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持ってきた」（同上19・39）と記されています。ヨハネ福音史家の細やかな配慮を感じます。ユダヤ教の教師という社会的地位にあり名譽を受けていたと思われる彼は、心の奥底で、イエスと通じていたのだと思います。

この1年、皆さまにお願いいたします。ご自分の洗礼の経緯を思い起こし、イエスとの関係が今どうなっているのかを問い直してみてください。

与えられた使命を果たせる1年でありますように 2024年

鹿児島教区司祭・助祭団

（敬称略）

教 区 長
名 譽 司 教
司教総代理
法務代理・事務局長

中野 裕 明
郡山 健次郎
泉 浩 二
霧 島 彬

鹿児島地区

末吉卓也（始良教会）、郡山健次郎（指宿教会）、鄭法鍾（加世田教会）、李秉徳（鴨池教会）、小隈憲士（ザビエル教会）、盛克志（福崎英雄（谷山教会）、朴鎮亮（種子島教会）、泉浩二（玉里教会）、貴島丈弥（紫原教会）、板尾泰英（吉野教会）、霧島彬（垂水教会）、J・タム（鹿屋教会）、J・サンタマリア（国分教会）、O・ベルナルディーノ（志布志教会）、G・ティエン（溝辺教会）、宋診旭（出水教会・阿久根教会）、福岡英雄、J・ハンマ（入来教会）、橋口啓悟（大口教会）、T・メニヒ（川内教会）

奄美大島・徳之島地区

内野洋平（大笠利教会）、松永正男、久保芳一、山浦義春（古田町教会・古仁屋教会）、朴昶奎（小宿教会）、申賢圭（瀬留教会）、山浦義春（大熊教会）、鈴木康由（聖心教会）、W・ボスコ、石田望（母間教会・和泊教会）

教区本部

中野裕明、小川靖忠（善き牧者幼稚園）、P・アン（ザビエル教会協力）、霧島彬

司教館 永山幸弘

その他

山口好信（出向）、寝占敦之（静養）、田原章（引退）

終身助祭

桃蘭淳一郎（鴨池教会）、久保俊弘（谷山教会）、川口茂（加世田教会）、石神秀人（阿久根教会）、四條淳也（喜界島教会）、小島芳武（川内教会）、池上利男、重久知司（徳之島地区）

司祭評議会

中野裕明（会長）、泉浩二（副会長）、小隈憲士、J・タム、朴昶奎、鈴木康由（教区司祭）、J・サンタマリア（ザベリオ宣教会）、盛克志、福岡英雄（レデンプートル会）、松永正男、内野洋平（コンベンツアル会聖フランシスコ修道会）、霧島彬（書記長）

ラ・サール会に大きな喜び

Br.ニコ・マリアーノが終生誓願宣立

11月5日（日）ラ・サール会鹿児島修道院（鹿児島市小松原2丁目）で、1人のブラザーの終生誓願式があった。司式したのは中野裕明司教。教区報では、誓願宣立の喜びを綴った英語文とその訳文を掲載し、鹿児島における同修道会の様子を紹介したい。

ご存知のように、ラ・サール学園は鹿児島市にあるカトリックの男子校であります。しかし、学校の中心

に修道院を構える「それほど若くはない」男たちをご存知でしょうか。彼らはラ・サール・ブラザーズと

呼ばれています。これは国際的な修道会で、「キリスト教学校修士会」として知られています。

若者たちに質の高いキリスト教教育と人間教育を提供するためにラ・サールのブラザーズの最初のグループが鹿児島に到着したのは70年以上も前のことです。

現在、ラ・サール学園には3人のブラザーが住み、働いています。Br.ド



写真中央が終生誓願を立てたBr.ニコ。Br.ニコに向かって左側がBr.ドミンゴ・ビジャミル（校長）



喜びいっぱいのラ・サール会の聖堂

As you may already know, La Salle Gakuen is a Catholic school for young men in Kagoshima City but do you know who are the “not so young” men whose convent is in the heart of the school? They are called the La Salle Brothers. The international congregation is known as the “Institute of the Brothers of the Christian Schools”. It was more than 70 years ago when the first group of La Salle Brothers arrived in Kagoshima to provide quality Christian and human education to the young. Today, there are three La Salle Brothers living and working in La Salle Gakuen: Br. Domingo Villamil FSC from Mexico (Community Director and School Principal), Br. Abet Pia FSC and Br. Nico Mariano FSC from the Philippines (Highschool teachers).

This year is a special year for the La Salle Congregation in Japan. Last November 5, 2023, we celebrated the Profession of Perpetual Vows of our young Brother in Japan. Br. Nico has been assigned to the Kagoshima community since 2020. The ceremony happened in the school chapel of La Salle Gakuen. The holy mass was presided by the Reverend Bishop Hiroaki Nakano and attended by the Brothers, the family and friends of Br. Nico and school representatives of La Salle Gakuen. It was an intimate and heartfelt ceremony.

During the mass and ceremony, Br. Nico made t3he lifetime commitment as a La Salle Brother. A portion of the religious vows says:

Wherefore, I promise and vow association for the educational service of the poor, chastity, poverty, obedience and stability in the Institute according to the Bull of Approbation and the Rule of the Institute. I promise to keep these vows faithfully all my life.”

We thank all those who have given their support and have sent their well wishes to the Brothers in this special occasion. Please pray for the La Salle Brothers so that we may continue serving the Church and the young people not only in Kagoshima but in other places in the world. (La Salle Community in Kagoshima)

教区人事

山浦義春神父

古田町教会助任司祭のミカエル山浦義春神父（コンベンツアル聖フランシスコ修道会）は、12月26日付けで大熊教会管理者。

司祭の消息

鄭成淙神父

2018年3月に仁川教区から鹿児島教区に派遣されたベルクマンス鄭成淙神父（大熊教会主任司祭）は12月26日、派遣期間満了のため帰国した。

11月の司祭評議会

11月28日（火）午後2時から、教区本部2階会議室で司祭評議会が開催され、集会祭儀司式者養成プログラムや「教区召命の日」、2024年度の教区行事について検討された。

特に集会祭儀司式者養成プログラムについては4月と5月に嘉松宏樹神父（長崎教区）と櫻井尚明神父（福岡教区）による公開講座を実施し、通常講義の講師を中野司教、永山神父、福崎神父、盛神父、山浦神父、内野神父、鈴木神父が担当することとなった。通常講義は原則として4月以外、第3日曜を鹿児島、第4日曜を奄美で実施することによって調整が進んでいる。

に、多くの方々からご支援をいただき、またブラザーたちにお祝いのお言葉をいただきましたことを感謝いたします。

ラ・サール修道会のために、特にブラザーたちが鹿児島だけでなく、世界中の若者たちに奉仕し続けることができるように祈りください。

（ラ・サール会鹿児島修道院）

「短信」

▼カトリック教師の会

12月10日（日）15時から17時まで、鴨池教会で教区カトリック教師の会の待降節黙想会が行われた。講師は福崎英雄神父で、自身の幼稚園での経験も交えながらの講話であった。



文芸

吉野教会 中江 均

ご慈悲の故人を偲び霊魂を陽射も添いし唐湊墓地のミサ

在りし日の師の面影に想い馳せ合掌しばし墓前に佇む

+KABAYAN SEKSIYON+

Ang Tala ng Mesiyas

“May nakikita ako pero hindi ngayon, nakikita ko siya pero hindi malapit. Isang bituin ang sisikat galing kay Jacob, at sa Israel ay may babangong isang tungkod.” (Bilang 24.17)

Ang propesiya ay inusal ni Balaam, isang pinagpapakitaan “mula sa Silangan” na ipinatawag ng haring Moabita na si Balak upang isumpa ang mga Israelita na, sa pangunguna ni Moises, nasa daan na papuntang Lupang Pangako. Ngunit sa pamamagitan ng pagkilos ng Diyos, pagpapala ang namutawi sa bibig ni Balaam.

Paniwala ng mga exeheta (dalubhasa sa Kasulatan) na ang propesiya ay sinadya ng may-akda upang ituro ang pag-rusbong ng dinastiya ni David, mga dalawang dantaon matapos ang kapanahunan ni Moises. Si David ang tala at ang setro na namumuno sa mga pinag-isang mga kaharian sa Israel at Juda. Pagkalaon, ang “tala” ay inilapat sa haring mesiyaniko, ang Anak ni David. Isang targum o salin ng Bibliya sa wikang Arameo ang nagsasalin sa teksto nang ganito: “Isang hari ang lilitaw kay Jacob, at ang isinugo, ang Mesiyas, lay lilitaw sa Israel.”

Pinaniniwalaan pa ng mga exeheta na ang panlikod na tabing ng kasaysayan ni Mateo tungkol sa mga Pantas at sa Tala ay isa diumanong propesiya ni Balaam. Tulad ni Balaam (na tinaguriang Hudyo manunulat na si Filon bilang magus), ang mga Pantas ay nangagpatibuhay mula sa silangan. Nakita nila ang tala ng kasisilang na hari ng mga Hudyo nang ito’y umakyat at sila’y dumating upang siya’y sambahin. Ang batang-hari para kay Mateo ay si Hesus, ang Mesiyas mula sa lipi ni David. Si Hesus, sa katunayan, ay tinatawag na “Anak ni David” sa Ebanghelyo.

Anu’t anupaman ang tungkol sa tala ng Bethlehem-maging isang likas na pangyayari o isang tanda sa Teolihiya-para sa Ebanghelista at sa kanyang komunidad, kahulugan nito’y si Hesus, ang Mesiyas sa lipi ni David, ang pastol-hari ng bayan ng Diyos.

At kung papaanong ang pagluluklok kay David ay “Nakita na” ng isang banyagang nagkapangitain at pantas, si Hesus ay makikilala mandin ng mga banyagang mga Pantas na kumakatawan sa mga “di-Hudyo na nanampalataya sa kanya bilang Mesiyas at Anak ng Diyos.

Ang Mga Tanda ng Kaligtasan sa Biblia (Fr.Dino Orolfo)

宣教には謙遜さが不可欠

聖ザビエルの生き方を学び司教の霊名を祝う



待降節第1主日の12月3日夜、鹿児島カテドラル・ザビエル記念聖堂で日本宣教の保護者聖フランシスコ・ザビエル司祭の祝日を記念するミサがささげられ、同聖人の霊名をいたたく中野裕明司教のために祈りがささげられた。

午後6時から

のミサには、約40人の信者が参列し、中野司教と泉神父、小隈神父、栃尾神父、アン神父が

奉獻生活者と共にささげるミサ

日時：2024年1月27日（土）14時
場所：ザビエル教会
司式：中野裕明司教様
小隈憲士神父様
※ミサ後に茶話会を予定
教区修道女連盟

イエス様が神殿で捧げられる場面に「八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はいエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。」とあります（ルカ2・21）。

この一節に込められたものを二回にわたって考えてみたいと思います。

さて「八日たって割礼の日を迎え（る）」というのは創世記にもレビ記にもみられる民族の規定です（創世記17・12、レビ記12・3）。これは神様との契約の証であり、それも体に刻み込む

ミサを司式した。

泉神父によるマルコ福音書朗読のあとに説教した中野司教は、ザビエルが日本に上陸した当時の教会の動きを説明し、「ザビエルはカトリック教会が本来あるべき姿に立ち返ろうと福音宣教を前面に打ち出したことを受けてアジアの宣教に乗り出した。そして日本での宣教には、謙遜さが大切だと訴えている。謙遜とは神にすべてを委ね、出会う人に合わせて自分をも変えていけるということ。宣教には謙遜が必要」とメッセージを送った。

ミサ後は教会のホールで中野司教の霊名の祝日を祝う茶話会が実施された。

イグナチオの霊操⑦

紫原教会主任司祭 貴島 丈弥

不偏心

「原理と基礎」には人間の造られた目的と、その目的のために他の被造物も存在するということが書かれています。

ここでいう「被造物」には、人、他の生き物など自然界に存在する動植物だけに限らず、物、お金、出来事、奉仕など、すべてのものが含まれます。

これらを「不偏心」によって「選択」し、「神を賛美し、敬い、仕える」という目的を達成するのです。ここにイグナチオの霊性における一つの重要な性質を見つけることができます。

それは、「その限りにおいて」（tantum quantum）という霊性です。

目的達成のために必要ならそれらを使用し、妨げになるのであれば離れるという選択ができる心の状態です。

薬の服用がよい例かもしれません。必要な分量を適

当な用途で使用する限り有効ですが、必要以上の量、または間違った薬を不適当な方法で服用するなら害にさえなります。

さらに広い意味で言うなら、『ラウダート・シ』、『ラウダート・デウム』などで警告されているような現在の世界の状態がそうです。神さまによって造られたすべてのものは、良いものですが、方法、タイミング、量、用途を間違えると有害にさえなります。

奉仕活動、ボランティア活動そのものは善い行いです。ですが、最も緊急の場合でない限り、やるべき勉強や責任が目の前にあるにもかかわらず行うなら、自分自身にも周りにも害が及んでしまう可能性もあります。



貧しいラザロ

いなかったということですから、もし割礼を受けない者がいるならばその者は契約を破った者として民の間から断つとまで神様は言われました（創世記17・14）

《康由神父の聖書教室》69

イエスという名前（1）

参照。

ここで忘れてはならないことは出エジプトにあたって荒れ野を彷徨った40年の間、イスラエルの民は自分たちの子供に割礼を施して

とところでイエスという名前ですがヘブライ語ではヨシユアです。イエスはヨシユアをギリシア語的に発音したものです。ヨシユアはホシヤと呼ばれていました。ホシヤと呼ばれるようになったがモーセによって改名させられました（民数記13・8、16、I歴代誌7・27）。

改名とは単に名称が変わるのではなく、神に於いて生き方が変わること、即ち、重大な転向を意味します。またヨシユアという名はエホシヤの短縮形でヤハウエの要素を含んだ最古の名であると言われています。

そしてこの名には「ヤハウエ（神）は救う」という意味があります。ということにはヨシユア・イエスという名前には神の独り子が救い主として見えるかたちで新しい時代の始まりとなったということが込められていると考えられます。

時折お話しするように旧約聖書と新約聖書は二つで一つの「聖書」です。こうした視点に立つて読むと読み飛ばしてしまいがちな箇所にながな気が付きます。

会 と 催 し 1月

- | | |
|--------|--|
| 1日（月） | 神の母聖マリア |
| 4日（木） | 七田八十吉神父命日（1980年） |
| 6日（土） | 申賢圭神父叙階記念（2017年） |
| 7日（日） | 主の公現 |
| 8日（月） | 主の洗礼 |
| 9日（火） | みことばを祈る集い・ザビエル教会・10時 |
| 10日（水） | 中野アカデミー・教区本部・13時30分 |
| 13日（土） | 聖書の分かち合い・教区本部・14時 |
| 14日（日） | 年間第2主日 |
| 17日（水） | 永島泰蔵神父命日（2002年） |
| 18日（木） | 中野アカデミー・教区本部・13時30分 |
| 19日（金） | キリスト教一致祈禱週間・25日 |
| 21日（日） | ハイシク神父命日（1989年） |
| 21日（日） | 年間第3主日（神のことばの主日） |
| 24日（水） | キリスト教一致祈禱会・日本聖公会鹿児島復活教会・15時（予定） |
| 24日（水） | 中野アカデミー・教区本部・13時30分 |
| 25日（木） | ロバート神父命日（2020年） |
| 25日（木） | 聖パウロの回心 |
| 26日（金） | 郡山健次郎名誉司教霊名 |
| 26日（金） | フェリエ神父命日（1919年） |
| 27日（土） | 奉獻生活者のためのミサ・ザビエル教会・14時 |
| 27日（土） | 聖書の分かち合い・教区本部・14時 |
| 28日（日） | 成相明人神父命日（2020年） |
| 28日（日） | 年間第4主日 |
| 28日（日） | オリーブの会・教区本部・14時 |
| 28日（日） | 世界子ども助け合いの日（献金） |
| 29日（月） | 「世界子ども助け合いの日」を呼びかける教皇庁児童宣教事業は、幼子イエスの保護にゆだねたいとの希望から、聖なる幼子の会または幼子宣教会ともよばれます。その目的は、「子どもたちを助けている子どもたち」をモットーに献身する、キリスト者の子どもたちの幸せを願って祈り、犠牲をささげ、支援を行います。日本でも、各教会等に加え、カトリック系の幼稚園や保育園の大勢の子どもたちが献金に手紙や絵を添えて協力しています。当日の献金は全世界からローマ教皇庁・福音宣教省に送られ、世界各地の恵まれない子どもたちのために使われます。 |
| 29日（月） | 鹿児島教区司祭大会・教区本部・30日 |
| 31日（水） | ボスコ神父霊名（聖ドン・ボスコ） |
| 【司教日程】 | 10日中野アカデミー、17日中野アカデミー、24日中野アカデミー、27日奉獻生活者のためのミサ、29日司祭大会・30日、31日カリス幼稚園 |
| 祈りの意向 | 【祈祷の使徒会】 |
| 教 皇 | 多様性という賜物 |
| 日本の教会 | すべての命を守る |

4年ぶりのバザーと ボスコ神父さまの誓願宣立銀祝

徳之島
地区教会

10月22日（日）徳之島地区教会では4年ぶりのバザーを開催しました。会場は天城町にある岡前教会で、この教会にとっては初めてのバザーとなりました。

バザーに関しては石田神父さまとバザー委員会が計画を立て、10時からミサ、11時からバザー開始としました。食事は「カレー」と「焼きそば」のみでしたが、大正琴、ハーモニカの伴奏にみんなが踊り出し盛り上がりしました。

また午後1時からの抽選会ではみんな「何が当たるか？」とワクワクしました。午後2時に終了したバザーでしたが、教会の信徒だけでなく地域の方々も足を運んでくださり、共に触れ合い語り合っておられ、教会の未来に希望を感じることができたものとなりました。「すべてよし」の大成功で、みんなの心が神さまのもとで一致団結した素晴らしいものになったと思います。

バザー準備委員会のメンバーは4日、聖霊教会から車を何十台も連ねてのパレードを見学しました。その光景は感無量でした。ごミサは2時間半もの長さ。そのあとの祝賀会では食事をしながら、お祝いのメッセージ、ダンスと延々と続きました。また私たちが日本から来たことで、大歓迎され、感謝の言葉をいただきました。



パレードの中のボスコ神父（中央）

まの前では皆が平等であると強調され、心からの優しさと皆さんの歓迎に神のいつくしみと平和を感じ、感動で涙が溢れました。3人にとって生涯忘れることの

できない体験となりました。余談ですが、台風6号にも歓迎され、13日間の実り多き旅となりました。ボスコ神父様への感謝の気持ちには私どもでは表現できないほどですが、今後も徳之島の教会のために石田神父様と力を合わせて邁進してくださることを願います。（徳之島教会・順 秀子通信員）

宣教師の遺徳を称え、列福を祈る

38回目のシドティ神父屋久島上陸記念祭

屋久島町と同町教育委員会主催による「シドティ神父屋久島上陸記念祭」が11月23日（木）午後、屋久島町小島にある「神父シドッチ上陸記念碑」前広場であった。

15時からの式典では、塩川文博さん（屋久島町教育

委員会教育長）、中野裕明司教、小島地区区長の岩川篤浩さんが挨拶した。塩川教育長と岩川区長は、シドティ神父の研究に没頭していたザベリオ宣教会のコンタリーニ神父と地元民との絆について触れた上で、シドティ神父屋久島上陸記念

祭は屋久島の文化遺産、郷土の教材として発展させていきたいと述べた。また中野司教は記念碑建立までを振り返り、38回目となった記念式典がこのように永きにわたって実施されてきた縁に触れ、地元の方々へ感謝の気持ちを伝えた。

その後は作家でシドティ神父の顕彰に尽力している古居智子さんが講話し、シドティ神父顕彰に立ち上がった地元人物を紹介するとともに、1942年に始まった記念碑建立の動きは戦中、戦後のゴタゴタで下火になったものの、1996年の明治維新100年事業で再燃、その11年後の町制施行20周年（1979年）を機に実現に至ったことなどを紹介した。

式典後は近くの小島地区公民館で、シドティ神父の生涯についてモニター上映があつた後、屋久島教会敷地にシドティ神父記念館を建てるために活動しているNPO法人やくしま未来工房の活動の様子が古居智子さんから紹介されるとともに資金調達のためのクラウドファンディングへの協力が呼びかけられた。



要理

使徒たちの働きを基礎として、教会が生まれ、広がりまし

た。教会が拠り所としてきた。教会の働きです。この教えを正しく受け継ぎ、後の時代に正しく伝えていくことが教会の働きです。教会と信徒のみなさ

の旧約聖書と新約聖書の他に聖なる伝承があります。この二つは神様を起源として

聖書と聖伝に基づく教会の教え

るのですから、互いに結ばれ、共通したものをもっていることは当然です。つまり人間が書いたり伝えたりしたものではないということに注意が必要です。

聖書とは聖霊が人間に書かせたものであると信じられています。また聖なる伝承、略して聖伝はイエス様と聖霊が使徒

に託し、真理の霊によって受け継がれてきた伝統であると言えます。このように聖書と聖伝に基づくものが教会の教えです。この教えを正しく受け継ぎ、後の時代に正しく伝えていくことが教会の働きです。教会と信徒のみなさ

しかし考えてみてください。神の独り子であるイエス様はこの地上で生まれ、生活し、死んで復活しました。そして再びこの地上に來られます。復活とは永遠の命を得ることです。であればイエス様が來臨するこの地上こそ神の国となり、ここで永遠の命を受け継ぐことになるはず

です。イエス様の復活はこのことの先取りであつたのです。神の国が実現がするために必要なことがイエス様が既に教えてくださった最も大切な掟です。そう、神への愛と隣人愛がこの地上に満ちる時、神の国が実現するのです。このことについては来月また少し詳しくお話しすることにします。